

フィラデルフィア年会ミッション・ボードの結成

—外国伝道協会から年会ミッション・ボードへ—

戸田徹子

山梨県立女子短期大学 国際教養科

The Formation of the Mission Board of Philadelphia Yearly Meeting

—From the Foreign Missionary Association to the Mission Board—

Tetsuko Toda

Department of International Studies, Yamanashi Women's Junior College

Abstract

This paper aims to explain the process that Philadelphia Yearly Meeting got interested in the Japan mission and reveal some factors that promoted the Yearly Meeting to take over the mission.

American Friends suffered great hardships for their belief in pacifism during the First World War. The American Friends Service Committee was organized during the War to provide conscientious objectors with non-combatant works. It also raised funds and gathered relief supplies for distressed Europe. After the War, the Committee developed its own way of social service and international goodwill in foreign countries. Inspired by the American Friends Service Committee's activities abroad, Philadelphia Yearly Meeting formed the Mission Board as one of its standing committees and assumed the responsibility of the Japan mission that had been undertaken by the Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia. It was after five years' consideration that Philadelphia Yearly Meeting decided to take over the mission. Philadelphia Friends were willing to participate in activities for war-relief, reconstruction and international goodwill without hesitation, but the ground for the whole Yearly Meeting to assume the responsibility of the mission was not firm. The Mission Board was to face the financial difficulties, for it could not collect enough donations from the Yearly Meeting members.

Keywords: Friends(フレンド), Quakers(クエーカー), Philadelphia Yearly Meeting(フィラデルフィア年会), Japan mission(日本伝道), American Friends Service Committee(アメリカ・フレンド奉仕団)

目次

はじめに

- 1 アメリカ・フレンド奉仕団の活動
- 2 海外活動委員会の報告
- 3 外国伝道協会からミッション・ボードへ
- 4 ミッション・ボードの組織と活動
おわりに

はじめに

フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会は正統派フィラデルフィア年会（以下、フィラデルフィア年会と略記）の女性有志たちによって1882年に結成され、1885年に日本伝道に着手した。この婦人外国伝道協会は1899年、その名称から「婦人」の文字を外し、フィラデルフィ

ア・フレンド外国伝道協会となり、日本伝道を推進した。この間、フィラデルフィア年会はずっと海外伝道に否定的立場をとり続けていた。というのも、フレンドは独自の信仰的立場から国内・国外を問わず伝道活動に反対していたからだった。ある特定の信仰に人を導くことはクエーカーリズムの「内なる光」や「聖霊の導き」の教えに反する。さらに宣教師は伝道を職業とし、信仰にかかわる「給料生活者」に他ならず、これもクエーカーリズムの「平信徒の教え」と相容れなかった。まして海外伝道となると、経費がかかるばかりでなく、計画的な活動が不可欠である。実際のところ、フレンド宣教師は海外でフレンドに伝統的な沈黙の礼拝を放棄し、プロテスタント諸教派に一般的なプログラムのある礼拝を採用していた。このことは教派の独自性を脅かすことにも繋がりがねず、この点でもフレンドは海外伝道に懐疑的だった。¹⁾

ところが 1923 年、フィラデルフィア年会はミッション・ボードを設け、フィラデルフィア・フレンド外国伝道協会の日本伝道事業を接收した。これまで年会内の少数派の関心事にすぎなかった海外伝道に、年会が乗り出した背景には、第一次世界大戦中に組織されたアメリカ・フレンド奉仕団の海外活動があった。本論では、フィラデルフィア年会ミッション・ボードの成立過程を追う。まず時代背景として、アメリカ・フレンド奉仕団の結成と活動を概観し、それから年会報告書や外国伝道協会資料、ボード資料に、ボード結成実現に向けて外国伝道協会役員たちが果たした積極的役割を明らかにする。最後に、ボードの初期段階（概ね 1920 年代）の組織と財政を紹介し、年会組織の一部となったとはいえ、支持者が少数であったがゆえに、ボードが直面した問題点を指摘したい。

1 アメリカ・フレンド奉仕団の活動

フィラデルフィア年会ミッション・ボードの成立事情を検討するにあたっては、まず第一次世界大戦時のフレンドの救援活動とその過程で生じた意識変化を知る必要がある。

英米のフレンドは世界大戦中、徴兵制度の下で苦境に陥った。フレンドは平和主義のゆえに軍務を拒否する者が多かったので、良心的兵役忌避者

のために非戦闘的な仕事を提供する組織をつくった。イギリスでは開戦後まもなく、フレンドの有志たちが Friends Ambulance Unit (FAU) を結成した。この組織はフランダース地方の戦場で負傷した兵士や一般人の治療にあたった。医師と看護婦は赤十字、ベルギー政府、英国陸軍から派遣を受け、フレンドはスタッフとして働いた。英国政府は FAU の活動は間接的にはあるが戦争に貢献しているとみなし、兵役免除を認めた。FAU はフレンド以外の若者たちにも門戸を開き、多くの良心的兵役忌避者に兵役に代わる任務を提供することになった。有志たちの活動に続いて、フレンドの教会組織も行動を開始した。ロンドン年会の執行部にあたる救難委員会は、ベルギーとフランスの住民や避難民を助けるために Friends War Victims Relief Committee (FWVC) を組織した。主な活躍の舞台はフランスで、初期段階ではドイツ軍占領地域から避難してきた農民たちに緊急措置として食料や衣類、宿舎を提供した。そして後には農業再興のために種子を配布し、プレハブ住宅や病院、老人施設を建設した。²⁾

アメリカの対独宣戦は 1917 年 4 月のことで、世界大戦勃発から約 3 年を経ていた。米国フレンドの戦争に対する反応は一枚岩ではなかった。だが公には正統派、保守派、ヒックス派の別なく、すべての年会が平和主義遵守の立場をとった。³⁾ 1917 年 4 月、フィラデルフィア年会、五年会（正統派年会の連合体）、Friends General Conference（ヒックス派年会の連合体）の代表者が集まり、英国フレンドのように戦時救援組織をつくることを決め、これがアメリカ・フレンド奉仕団の創設につながった。その目的とするところは、良心的兵役忌避者に兵役に代わる仕事を提供すること、国内のフレンドに戦時において平和の証をする機会を提供すること、そしてヨーロッパの戦後再建に貢献することなどだった。結局、アメリカのほぼ全ての年会が奉仕団に参加することになった。奉仕団の最終案がまだ固まっていない段階で、約百名のボランティアがハバフォード大学に集結し、救援活動訓練を開始した。当初、奉仕団は英国の FWVC に加わって活動することを考えていたが、ウィルソン大統領は米国の救援活動を一括して赤十字に委ねることを決めており、奉仕団の活動は赤十字配下で展開されることになった。さ

らに戦時局との話し合いの結果、フランスに赴任する者は兵役免除が認められた。1917 年末には男性 116 名、女性 20 名がフランスで働いていた。

終戦を迎えても、奉仕団スタッフはヨーロッパ大陸にとどまり、とりわけドイツの復興活動において顕著な役割を果たした。戦時中の農産物増産と対ベルギー食糧援助を指揮していたハーバート・フーバー — 後の商務長官、大統領 — はフレンドであった。フーバーはドイツの子供たちに食事を提供するプロジェクトを奉仕団に委託し、この活動は 1922 年まで続いた。

戦後復興には物質的援助ばかりでなく、和解と戦争予防が必要である。英国フレンドはヨーロッパ各地にフレンド・センター（別名、クエーカー・エンバシー）を設置した。センターは国際理解と国際親善を促進する場、生活や教育を通してクエーカーの教えを広げる場として位置づけられた。戦後、奉仕団は英国フレンドと歩調を合わせて復興活動を展開し、フレンド・センターの企画にも参加した。1921 年の時点で、アメリカ・フレンド奉仕団はドイツに 44 名、ポーランドに 22 名、オーストリアに 16 名、セルビアに 15 名、フランスに 3 名、ロシアに 1 名、スタッフを派遣していた。このように奉仕団は活動地域をフランスから、中欧へ、そしてロシアに広げていた。

アメリカ・フレンド奉仕団はもともと戦時中に良心的兵役忌避者に非戦闘的な仕事を提供するために、そして対ヨーロッパの資金や救援物資を集めるために創設された。それゆえ終戦後、解散する可能性もありえた。しかし戦争を防止するには、平和を実現するための基盤づくりこそが必要であり、国際親善や社会問題を扱う常設組織が要するという判断に基づき、存続が決まった。奉仕団は、1924 年、その活動範囲を見直し、4 つの分野 — Foreign Service, Interracial, Peace, Home Service — の仕事を担うべく、組織を再編成した。再編当初は海外活動が中心で、救援活動とフレンド・センター支援を継続した。国内活動としては、失業炭鉱労働者やシェアクロッパーの支援、貧しい農村地帯や都市スラムでのワーク・キャンプ、平和教育プログラム、人種差別をなくすためのプログラムなどに取り組んだ。⁴⁾

歴史を紐解くと、19 世紀は米国フレンドにとって静寂主義時代だった。少数教派として生き延び

るため、フレンドは教会規律を厳格にして内部結束を強化し、できるだけ外界との接触を避けて生活していた。ところがこの殻を破り、福音主義を受容するフレンドが現れ、むしろ彼らが福音主義フレンドとして台頭してきた。さらに大学に進学するフレンドも増加した。福音主義フレンドと高学歴フレンドは社会的福音運動に触れて、様々な社会問題に取り組み始めた。そして第一次世界大戦時の平和主義から派生した各種の活動 — 救援活動、再建活動、国際交流活動など — を通して、さらに多くのフレンドが意識変革を迫られることになった。戦争は個人の罪や欲望から生じるのではなく、階級対立や人種偏見、軍国主義、帝国主義、国粹主義など社会や政治の問題から生じる。平和を求めるのであれば、このような問題に対処しなければならず、社会や国家を相手に活動しなければならない。むしろ積極的に国際問題や国内問題を解決しようとする姿勢をフレンドは身に付けたのである。この意味で、さらに分裂していた年会の壁を越えてフレンドたちが一致団結したという点で、第一次世界大戦とフレンド奉仕団結成はアメリカのクエーカー史に一大転換期をもたらした。奉仕団の活動を通して、これまで内向きだった米国フレンドは一挙に海外へ、それから国内の社会問題にも関心を広げたのである。⁵⁾

奉仕団の本部はフィラデルフィアに置かれていたが、奉仕団の活動において、フィラデルフィア年会の働きには顕著なものがあつた。まず寄金額で他の年会を圧倒していた。さらに奉仕団創設者の一人で、長く会長職にあったルファス・M・ジョーンズと、その後継者となったヘンリー・J・キャドベリーはフィラデルフィア年会を主な舞台として活躍しているフレンドであった。それだけにアメリカ・フレンド奉仕団の政策と活動がフィラデルフィア・フレンドに与えた影響は大きかった。⁶⁾

2 海外活動委員会の報告

フィラデルフィア年会にミッション・ボードが設置される直接的契機となったのは、1918 年 3 月にフィラデルフィア・フレンド外国伝道協会が年会に送った手紙だった。⁷⁾ この中で、外国伝道協会は、フィラデルフィア年会の会員たちが外国伝道協会やヤング・フレンド委員会などを通して、

あるいは他教派や超教派の組織を通して展開している海外活動を把握するために、委員会を設けることを提案した。外国伝道協会はすでに30年間、日本伝道を支援していた。フィラデルフィアのヤング・フレンドたちは19世紀末から英国のヤング・フレンドとの交流を深めていたが、その関心を非キリスト教国にも広げつつあった。さらに伝道活動とは異なるが、フレンド奉仕団に参加してヨーロッパに渡った年会員たちも多かった。若者たちの伝道意識や海外への関心をさらに高めるために、そして海外に必要な援助ができるように、年会はそれなりの役割を果たすべきであるというのが手紙の主旨だった。

フィラデルフィア年会はこの要望を慎重に審議し、検討委員会を設置した。翌年、この委員会は、海外伝道は従来通り既存組織に委ね、年会は直接関与しないという結論をだした。他方で、委員会は以下の画期的な提案をした。

We would encourage those engaged in promoting missionary effort to share their concerns with their Monthly or Quarterly Meetings. We believe that in many instances a sympathetic response would be made to such appeals.

すなわち海外伝道を公認した上で、月会と四季会に支援活動を奨励したのである。同時に、委員会は、フィラデルフィア年会の会員たちが従事している各種海外活動の情報が、地元に届いていない実態を指摘した。そこで検討委員会は試験的に、新たな委員会として「海外活動委員会」(the Committee on Christian Labor in Foreign Lands)を置くことを勧告した。この委員会は3年を期限に設けられる委員会で、海外活動を企画・実施するのではなく、年会内で海外伝道支援体制づくりの可能性を探るとともに、年会員たちの海外活動状況を把握し、情報提供する役割を果たすものだった。⁸⁾

この海外活動委員会で主導権を握っていたのは、外国伝道協会関係者だった。海外活動委員会は年会が任命する委員5名と各四季会代表者7名から構成されていたが、5名の選任委員は全員、外国伝道協会メンバーで、うち3名が協会役

員だった。委員会報告は、常にアメリカ・フレンド奉仕団の動向に言及しているが、それによれば日本伝道は奉仕団の救援活動や復興活動ほど関心を引く事業ではなかった。そこで委員会は、日本伝道が後者に劣らず重要であることを強調していく。

海外活動委員会の初年度(1920年)の報告は、海外伝道とヨーロッパの再建事業の双方を視野に入れ、年会員の「海外活動」を文字通り概観している。ヨーロッパで救援活動や復興活動に参加している年会員は約80名、伝道活動では日本に3名、中国に4名の年会員が赴いていることを委員会は報告し、このように多くのフレンドが海外で活躍していたことはなく、この第一次世界大戦後の現象は、草創期のクエーカーリズムの伝道活動を彷彿させると語る。そして委員会は、以下のように期待を述べた。大戦を通して、世界が必要としているものに対する感受性—“this sensitization to the needs of the world”—が生まれた。国際社会のなかで、この感受性を育み、どう活かしていくかが問われることになる。物質的な援助が窓口となって、霊的、精神的な交流が始まる可能性もある。そして、このような感受性や可能性を持続させ反映できるように、恒久的な受け皿を用意する必要がある。⁹⁾この時点で、アメリカ・フレンド奉仕団はまだ存続を決めていなかった。しかし、英国フレンドは、国際理解と国際交流を促進し、日常生活を通してクエーカーの教えを伝播する場として、すでにフレンド・センターをヨーロッパの主要都市に設置しつつあった。それゆえ物質的援助から始まる国際親善という考えは、あながち的外れではなかったといえよう。

さらにヨーロッパで活動した若者が、海外伝道に関心を抱き、ほんの数年でも、あるいは生涯の仕事として、宣教師になって非キリスト教国に赴任してくれることも期待していたようだ。といって、奉仕団と競合する面について無自覚だったわけではない。奉仕団の活動を糸口に、フレンドの関心が海外に広がっていくことを歓迎する一方で、海外伝道が軽視されがちになっていることに報告書は懸念を示した。救援・復興があまりに緊急性の高い問題なので、非キリスト教国の悲惨さがかすんでしまう。改めて非キリスト教国の後進性

を思い出させる必要があった。そこで、第一次世界大戦の死傷者数と、非キリスト教国で予防可能な病気や魔術で亡くなる人の数を比較し、非識字率をあげている。苦難、無知、迷信が焙り出される事になった。なかでも日本伝道については、あまり目立たないものの、長年にわたり続けられてきた実績が強調されている。¹⁰⁾

2 年目 (1921 年) の報告書では海外伝道が、とりわけ日本伝道がクローズアップされている。報告書において、海外活動委員会は日本伝道を支援すべき 3 つの理由をあげた。第 1 は、国際関係のなかで当時日本が置かれていた危機的状況であった。第 2 は、日本年会がフィラデルフィア年会を母年会とみなし、フィラデルフィア年会から然るべき人を派遣して欲しいと要望していることだった。最後に、日本フレンド伝道の資金と施設が不十分で、日本で伝道活動に従事しているフィラデルフィア年会の会員たちが困難に直面している現状に言及した。¹¹⁾

この 1921 年の海外活動委員会報告には、前年の外国伝道協会代表団による日本視察の結果が色濃く反映されていた。1920 年、外国伝道協会を代表してウォルター・W・ハビランドと、ウィリアム・W・コリンズ、ジュリア・C・コリンズ夫妻が日本を訪問し、日本フレンド伝道の現状と将来について現地のフレンドと話し合いをもち、普連士女学校や、東京と茨城にある教会等の関連施設を視察した。¹²⁾ ハビランドは外国伝道協会の会長で、ジュリア・コリンズは書記。かつ 2 人は海外活動委員会の委員でもあった。

1921 年の年会報告で指摘された、国際政治における日本の位置づけ、言い換えれば日本の脅威という点については、外国伝道協会が発行した募金パンフレットが参考になる。第一次世界大戦後、外国伝道協会は日本フレンド伝道の施設充実を目的として 58,000 ドルの特別ファンド募金を開始した。募金用リーフレットは、“A Work of Preconstruction---to aid in ending the ‘next war’ NOW” と題されていた。¹³⁾ このなかで日本フレンド伝道の主任宣教師、ギルバート・ボールズは、日本伝道の重要性を以下のように説明した。フレンドは世界大戦を阻止できなかったという自責の念から、ヨーロッパの救援と再建に尽力している。だが東洋に目を転じると、そこには戦争の火種が

ある。*The Japan Advertiser* 誌から、日本の海軍拡張についての記事を引用し、ボールズは警告を発した。そしてフレンドはヨーロッパのことばかり心配しないで、世界情勢を把握した上で、東洋に目を向けるべきであると、次のように主張した。

My direct and immediate purpose in thus writing for Friends in America is to call their attention again to the fact that here in the Orient we are face to face with large and urgent tasks of reconciliation and “preconstruction.” We would support in every way possible the appeal of the starving millions of Europe, and we do not ask that the messengers of peace and good-will whom God is sending to Germany and Austria be diverted to Japan. We do feel, however, that as Friends endeavor to keep the whole world situation in mind, and as they recall the way in which their hearts were wrung because of their share of failure to prevent the European calamity which made the relief and reconstruction work necessary, — they should at this hour give new consideration to the claims of the Orient.

おそらく“preconstruction”とは造語であろうが、この言葉は太平洋で戦争が起きないように日米関係を改善・強化することを意味した。すでに外国伝道協会時代から、国際社会における日本の重要性が指摘され、アメリカの安全のためにも伝道活動が必要であるという主張が宣教師の側から出されていたわけであるが、この見解はフィラデルフィア年会ミッション・ボードにおいて更に強くなっていく。

政治的な背景に加え、外国伝道協会が年会に海外伝道支援を求めたのには経済的理由も大きかった。元来、外国伝道協会の会員数は非常に少なかった。フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会として発足した当初、この伝道団体は教派的に、地域的に、そして女性組織として制約があった。そればかりでなく、この婦人外国伝道協会に対して年会は反対の立場を公にし、初期の段階においては加入しないように勧告すら出していた。年会内で海外伝道は「疑わしくて

危険な活動」(“doubtful and dangerous forms of entertainment”)¹⁴⁾とみなされていたのであった。1899年には名称から「婦人」の文字を削除し、男性も加入できるようになったが、これによって会員数が激増したわけではなく、一方で日本伝道の経費は毎年のように増大していったので、財政状況は好転しなかった。1918年に外国伝道協会が年会の関与を模索し始めたとき、フィラデルフィア年会の会員数は4,400名であったが、このうち外国伝道協会に献金していたのは1,000名にすぎなかった。¹⁵⁾もしフレンドとフィラデルフィアの看板が外せないのであれば、残された道は年会の積極的な支持を確保することだった。外国伝道協会は日本フレンド伝道の施設改善を計画し、その募金を開始していた。資金確保は差し迫った問題だった。

この時点で、外国伝道協会が年会の後押しを期待したとしても不思議ではなかった。フィラデルフィア年会の社会に対する姿勢は確実に変化していた。フィラデルフィア・フレンドたちはアメリカ・フレンド奉仕団の活動を通して、視野を広げつつあった。伝道という言葉には違和感をもったとしても、平和活動や国際交流、社会サービスの側面については理解が得られる可能性は高かった。

3 外国伝道協会からミッション・ボードへ

1922年、海外活動委員会は3年の活動期間を経て、最終答申を出した。それは年会が外国伝道協会の仕事を引き継ぎ、本格的に海外伝道に取り組むべきことを提案していた。初代クエーカーたちが英国全土を、そしてアメリカ、ドイツ、オランダ、ロシア、バルバドスに布教活動を展開したことに触れ、このクエーカーリズムの伝道精神が、第一次世界大戦の戦中・戦後のフレンドの活動において甦った、と海外活動委員会は以下のように述べた。

During the late war this sense of mission was signally revived, and meetings were again fired by the giving of young life to minister of the needs of those, whom having not seen we loved. We caught once again the power that comes from losing life in surrender of

ourselves to the needs of the world.

しかし今や救援・復興の必要は消えつつあり、フィラデルフィア年会が再び内向きになる危険性がある、と次のように続ける。

And now the temporary need is passing, and we must face the possibility that our Yearly Meeting may easily settle back within itself, while the continuous needs of our fellowmen the world over call to deaf ears.

時が過ぎると、世界に対する敏感さが失せてしまうであろう。年会に本格的なミッション・ボードを設けるのであれば、世界大戦とフレンド奉仕団の活動を通して、フィラデルフィア年会メンバーたちが、海外に関心を示している今がチャンスだった。そこで委員会は、キリスト教はもともと世界的な視野をもつ宗教であり、フレンド奉仕団では網羅できない海外活動を年会が維持し、外国伝道協会の事業を引き受けるべきだと主張した。

If then a vital type of Christianity is essentially worldwide in its concern, we believe that there should be a Board or Committee as an intrinsic part of the Yearly Meeting which should consolidate the foreign work not covered by the American Friends' Service Committee.¹⁶⁾

最終報告は、新しい組織の支援対象と財政措置についても言及していた。まず外国伝道協会が展開してきた日本伝道以外に、フィラデルフィア年会のメンバーが参加している海外伝道についても注意を払うべきことが述べられている。財政については、年会に財源を求めるのではなく、自前で資金を確保することが原則で、年会から支給を受ける場合でも小額とする。外国伝道協会は会費と寄金で運営されていたが、年会ミッション・ボードにあっても、あくまで自発的な寄金により資金を確保する。さらにアメリカ・フレンド奉仕団関係以外の、海外活動への資金分配の役割をも期待されていた。¹⁷⁾

とはいえ、この委員会報告が年会ミッション・

ボード設置に直結したわけではなかった。海外活動委員会の最終答申は、1922年3月末のフィラデルフィア年会で審議された。海外活動委員会はあらかじめ外国伝道協会に移譲の件を申し入れ、すでに承諾を得ていた。しかし年会の結論は、“The [Philadelphia Yearly] Meeting without more complete knowledge at its command of what this transfer contemplates felt that it would be unwise to assume such a change at once.” というものであった。外国伝道協会と交渉にあたる委員会が新たに構成され、細部の検討が委ねられた。¹⁸⁾ そして年会にミッション・ボードが設置され、最初のエグゼクティブ・ボードの会議がもたれたのは漸く1923年4月になってからのことだった。

外国伝道協会の提案からミッション・ボード結成に至るまでに、3つの委員会が構成され、5年の歳月が費やされていることを忘れてはならないだろう。あくまで年会は海外伝道に対して慎重な態度をくずさなかったのである。最終的にミッション・ボードは結成されたとはいえ、海外活動委員会が海外伝道をなかば無理やり年会の公式活動に加えたのであり、その海外活動委員会で実権を握っていたのは外国伝道協会関係者たちだった。フィラデルフィア年会全体がミッション・ボードの設置を歓迎していたわけではなかった。もともと海外伝道は一部のフレンドだけが推進している、むしろ年会内では白眼視されてきた活動であった。さらに救援、再建、そして国際理解といった活動と比べると、日本伝道はそれほど必要度の高い仕事とは思えなかった。外国伝道協会の指導者たちは年会内の無関心や反対を十分に認識していた。外国伝道協会年報の最終号には以下のように記されている。

The transfer of the work to new hands is made with mingled feelings by those who have so long been identified with it. To lay aside responsibility for an enterprise which has for many years had so strong a claim on their time and interest, must cause real regret. This regret is more than compensated by the joy which it gives to them and to all who have the interests of Christian missions at heart, to

feel that the work which has heretofore been carried on by a comparatively small part of the membership of the Yearly Meeting, has now become the responsibility of all.¹⁹⁾

年会が日本伝道に関わることになった。これを喜ぶ反面、外国伝道協会は遺憾の意を表さずにはいられなかったのである。ここで“mingled feelings”とは、日本伝道のために多くの時間とお金を費やし、度々の財政危機をかろうじて乗り切ってきた少数派フィラデルフィア・フレンドの複雑な思いを表していた。それは、年会の反対があればこそ結束し、内輪で推進してきた伝道事業を手放す寂しさであり、これまで冷淡だった年会にそれを委ねることに対する一抹の不安だった。

4 ミッション・ボードの組織と財政

1923年10月1日に、ミッション・ボードは外国伝道協会から伝道事業の管理運営と財務を正式に引き継いだ。第一次世界大戦後の高揚した雰囲気の中でボードは設置されたが、年会員の多くは日本伝道について無知だった。支援を確保するため、ボードは積極的に情報提供し、伝道意識を鼓舞しなければならなかった。ミッション・ボードが年会に提出した最初の報告書は、海外伝道が全ての年会員で担うべき活動となったことを強調していた。

We would urge that the members of Philadelphia Yearly Meeting be mindful of the fact that this Mission Work is now a Yearly Meeting concern. Philadelphia Yearly Meeting stands behind it, and such a work, so sponsored, should lay its weight of responsibility on the heart of every member of the Yearly Meeting. Our membership must become increasingly alive to this responsibility.²⁰⁾

これは1903年以来、約20年にわたって外国伝道協会の会計を務め、ミッション・ボードでも財務委員会メンバーとして活躍したデビット・G・オルソップの言葉で、婉曲的ながら、寄金を求める切実な願いが込められたメッセージだった。

はたして年会は海外伝道に対して如何なる支援体制で臨み、財政はどのような状態だったのであろうか。ここでは初期(1920年代)の様子を簡単に紹介しておく。

ミッション・ボードは、ゼネラル・ボード、エグゼクティブ・ボード(執行部)、ローカル・ボードの3つのボードからなる。ゼネラル・ボードは年会選任メンバーと各月会代表メンバー(原則として各月会から2名)により構成された。ゼネラル・ボードの任務は伝道地の情報を提供し、伝道への関心を育むことで、年に4回、集会を開き、伝道方針に関わる事項を決め、宣教師を任命した。ゼネラル・ボードの役員は会長、副会長(2名)、書記、会計で、他に広報委員会と財務委員会が置かれた。エグゼクティブ・ボードのメンバーは15名(後に18名に増員)で、ゼネラル・ボードのメンバーから選出されるが、ゼネラル・ボードの役員たちは自動的にこれに含まれた。エグゼクティブ・ボードは7月と8月を除き毎月会合を開き、実務を取り仕切った。そして各月会にはローカル・ボードが置かれ、上部組織の意向がここに伝えられ、寄金集めやミッション・スタディーの窓口となった。²¹⁾

初代役員は、会長がロイド・ボルダストン、副会長は2名でエドワード・G・ローズと婦人外国伝道協会創立以来のメンバー、レベッカ・N・テイラー、書記はマーガレット・W・ローズ、会計はジョン・ウェイで、全員が外国伝道協会関係者だった。しかもボルダストンとエドワード・ローズの娘はともに在日フレンド宣教師であった。さらにエグゼクティブ・ボード構成員18名のうち、外国伝道協会に所属していなかったのは2人にすぎない。²²⁾ ミッション・ボードは旧外国伝道協会役員たちの主導の下で、活動を開始した。

これまでの婦人外国伝道協会時代、そして外国伝道協会時代を通して、海外伝道支援者の多くはフィラデルフィア近郊に住む富裕層であり、いくつかの特定月会(フィラデルフィア12番街、ハバフォード、ジャーマンタウン、モレスタウン)に偏在していた。外国伝道協会時代には支部(branch)は10しかなかった。ミッション・ボード体制下では各月会にローカル・ボードが設けられることになり、年会内に一挙に下部組織が張り巡らされた。1926年にはローカル・ボードは

24を数えた。²³⁾ このような下部組織の増加は安定した収入をもたらしたのだろうか。言い換えれば、年会という後ろ盾を得て、財政状態は改善したのだろうか。

ミッション・ボードは日本への送金だけで毎月、2,400から2,500ドルのお金がかかり、年間予算では約32,000ドルが必要とされた。ボードの任務は年会員の海外伝道活動を支援するというものであって、必ずしも対象が日本伝道に限定されていたわけではなかった。実際のところ、海外活動委員会の段階では、フィラデルフィア・フレンド外国伝道協会以外のルートで中国に赴任している年会員たちの動向も紹介されていた。しかしながら、早くも1925年には、期待したほど寄金が集まらないので、日本以外の地域に回すお金がないことが判明した。²⁴⁾ それどころかボードは慢性的に赤字状態で、日本への月々の送金が滞ることもあった。他教派と同様に、ミッション・ボードの懐具合は厳しいもので、とりわけ会計年度末には赤字解消を期して、財務担当者たちが有力支援者を回るような状態が続いた。²⁵⁾

試みに、ミッション・ボード議事録に初期の会計報告と財務委員会報告を追ってみよう。1924年はほぼ毎月、赤字が生じ、1924-1925年の会計年度末には赤字が6,000ドルに達した。しかし財務委員会の努力により、個人の寄金が集まり、かろうじて赤字は解消された。このような事態に危機感をもった財務委員会は、1925年3月25日に、ローカル・ボードの会計を招集し会議を開いた。ボードの財政状態の報告があり、各月会に寄金割当を課すことが検討された。割当額はあくまで目安あるいは目標値であり、必ず達成しなければならない数値ではないという前提で、月会への寄金割当額が示された。だが、問題は解決に至らない。1926年12月10日のゼネラル・ボードでは、財政難で11月分の送金ができなかったことが報告されている。1927年1月14日のエグゼクティブ・ボードでは、会計が次の報告をしている。1925-1926年度も赤字で、赤字額は前年度の半分ほどの3,238ドルだった。幸いにも赤字解消のために1,000ドルの寄金を申し出る人が現れ、残額は再び財務委員会メンバーが心当たりの支援者たちに頼んで確保した。同日の財務委員会報告には、会計が年度当初から資金不足に

悩まされ続けてきたこと、そして全てのローカル・ボードの会長と会計に寄金要請の手紙を出したが反応が鈍いことが記されていた。²⁶⁾

年会報告のなかで、ボードは毎回、年会員たちに寄金を促した。年会員たちの資力を考えれば、もっとお金が集まるはずである。25ドル寄付できるはずの人が、10ドルしか出していない。日本人フレンドも自給教会を目指して努力しているが、まだまだアメリカからの支援が必要である。このような呼びかけにもかかわらず寄金はなかなか増えなかった。寄金が集まらない理由として、ボードは、大口寄金者が相次いで亡くなっていることと、フレンドの関心が多様化し、他分野に寄金が流れている可能性を指摘していた。²⁷⁾ いずれにせよ、各月会にローカル・ボードが設けられ、下部組織が増えたとしても、それは資金増には直結してこなかった。すなわち、伝道支援者を増やして、広く浅く寄金を募るやり方は、あまり効果はなかったようだ。エグゼクティブ・ボード議事録(1925年9月11日)には、ミッション・ボード結成早々、赤字に直面した財務委員会について、次のような記録が残されていて興味深い。

The Finance Committee reports that since our last Meeting they have carefully gone into the current financial situation and are vigorously trying to meet the present crisis through the well worn and effective method by personally approaching certain individuals, known to have the welfare of the Mission Board at heart, for special assistance.²⁸⁾

寄金を確実に集めるには、理解のある特定個人に直接お願いするという、昔ながらのやり方が有効である。経済的な面で当てになるのは、婦人外国伝道協会以来の、あるいは外国伝道協会以来の、筋金入りの海外伝道支援者たちであるということとを、財務委員会の人たちはあらためて知ったのではないだろうか。

年会メンバーの無関心は金銭面だけではなく、年4回のゼネラル・ボードへの出席率にも表れていた。²⁹⁾ フィラデルフィア年会は戦時救援、戦後復興、そして国際理解などのフレンド奉仕団の活動には躊躇なく参加した。それどころか、ア

メリカのクエーカー界でこれらを提唱し、指導する立場だった。しかし同じ海外活動でありながら海外伝道については、年会内の支持基盤は極めて脆弱なものだったといえる。

おわりに

外国伝道協会は、奉仕団の救済活動・復興活動の勢いを借りて、海外伝道への、とりわけ日本伝道への関心を盛り上げようとした。そして1923年、年会にミッション・ボードが設置された。

だが誤算もあった。まず財務である。年会ミッション・ボードに移行したことによって、日本伝道は年会事業の一部になった。しかしながら資金は自己調達が原則だった。年会の傘下であって、確かに下部組織の数は増えたが、実質的に支援者数が増えたわけではなかった。寄金額は低迷し、財政問題は改善されないままだった。1920年代、ボードは財政難から脱却できなかった。1930年代になると、大恐慌の影響で寄金が大幅に減り、財政はさらに逼迫していった。

もう一つは、奉仕団との関係である。ヨーロッパの復興活動に区切りがついたとき、奉仕団は存廃問題に直面した。結局、奉仕団は存続を決め、組織を4つの分野に再編したわけであったが、その一つが海外部門で、海外援助以外に国際理解と国際交流にも乗り出そうとしていた。そもそもミッション・ボードは奉仕団の活動範囲外の海外活動をカバーする目的で、結成されたのである。ところが奉仕団の海外部門の活動と、ミッション・ボードが今後、重点を置こうと考えていた活動が重複してしまった。“The American Friends’ Service Committee arose during the war and took the form of relief. Now, however, it has swung over to the same type of work which the Mission Board is wanting to do.” とは、ボード側の見解であった。³⁰⁾ ここにおいて2つの組織の間で調整が、そして後には協力が必要になっていくのである。

註

- 1) 拙稿、「フィラデルフィア・フレンド婦人外国伝道協会の誕生」『山梨県立女子短期大学紀要』33(2000)、73-86；「婦人外国伝道協会から外国伝道協会へ」『同紀要』34(2001)、

- 85-92.
- 2) John Ormerod Greenwood, *Friends and Relief* (York, England: William Sessions Limited, 1975), 165-184.
 - 3) 米国フレンドの第一次世界大戦に対する反応は様々で、適格者で戦争に参加したのは3分の2だった。なかには新聞で公にフレンドの平和主義に異論を唱えたグループもいたし、軍事訓練を実施したフレンド系の大学もあった。以下、米国フレンドの大戦への対応は次を参照。Hugh Barbour and J. William Frost, *The Quakers* (New York: Greenwood Press, 1988), 247-260; Philip S. Benjamin, *Philadelphia Quakers in the Industrial Age, 1865-1920* (Philadelphia: Temple University Press, 1976), 192-215; Elbert Russel, *The History of Quakerism* (Richmond, Indiana: Friends United Press, 1979), 510-528.
 - 4) Barbour and Frost, 254, 264-265.
 - 5) Benjamin, 73-99, 148-169; *ibid.*, 247, 254-258, 262-263;
 - 6) Barbour and Frost, 253; John M. Moore ed., *Friends in the Delaware Valley* (Haverford, Pennsylvania: Friends Historical Association, 1981), 234-247.
 - 7) この手紙によれば、外国伝道協会は年会にアプローチすることを考えていたわけではなかったという。日本伝道を支えるため、外国伝道協会は2つの若者たちの組織との提携関係を強化しようと会議を重ねていたところ、全く予期しなかったことに、年会にアプローチすべきであるという結論に達したという。Minutes of the Executive Board of the Foreign Missionary Association of Friends of Philadelphia (FMA), 1/11, 3/8, 1918; *Extracts of Philadelphia Yearly Meeting*, 1918, 8-9.
 - 8) *Extracts of Philadelphia Yearly Meeting*, 1919, 59-61.
 - 9) *Ibid.*, 1920, 59-63.
 - 10) *Ibid.*, 1920, 62.
 - 11) *Ibid.*, 1919, 62; 1921, 55-56.
 - 12) *Annual Report of the FMA*, 38 (1920), 16; Minutes of the Executive Board of FMA, 5/27/1920.
 - 13) Gilbert Bowles, "A Work of Pre-construction," nd.
 - 14) Mary R. G. Williams, typescript read on the occasion of the One-Hundredth Anniversary of Haverford Meeting on Buck Lane (1938), 1.
 - 15) Minutes of the Executive Board of the FMA, 2/8/1918.
 - 16) *Extracts of Philadelphia Yearly Meeting*, 1922, 44.
 - 17) *Ibid.*, 1922, 46.
 - 18) *Ibid.*, 1922, 10.
 - 19) *Annual Report of the FMA*, 41 (1923), 37.
 - 20) *Extracts of Philadelphia Yearly Meeting*, 1924, 88.
 - 21) The Mission Board of the Religious Society of Friends of Philadelphia and Vicinity, "A Transpacific Message," 1925, 42-44. ミッション・ボードは年報を一回(1924)しか発行していないが、この"A Transpacific Message"と題された冊子は年報2号(1925)に代わるものとして発行された。(Minutes of the Executive Board, 10/9/1925) なおボードは毎年、年会に活動内容等を報告しており、その内容は"Report of the Mission Board"として*Extracts of Philadelphia Yearly Meeting*に掲載されている。
 - 22) *Ibid.*, 40-41; *Annual Report of the Mission Board of Philadelphia Yearly Meeting of Friends*, 1 (1924), 30-31.
 - 23) *Extracts of Philadelphia Yearly Meeting*, 1926, 83.
 - 24) *Ibid.*, 1925, 91; Minutes of the General Board, 3/29/1927.
 - 25) Valentin H. Rabe, *The Home Base of American China Missions, 1880-1920* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1978), 141-153.
 - 26) Minutes of the Executive Board, 4/10/1925, 1/14/1927; Minutes of the General Board, 12/10/1926.
 - 27) *Extracts of Philadelphia Yearly Meeting*, 1926, 84; 1929, 98; 1930, 88.

- 28) Minutes of the Executive Board, 9/11/1925. 名しか参加せず、書記が注意を喚起している。
- 29) ゼネラル・ボードの出席者は通常半数程度 Minutes of the General Board, 9/17/1926. だった。1926 年 9 月 17 日は新年度最初の
- 30) *Ibid.* 集会だったにもかかわらず、87 名のうち 27

